

Shorai Foundation
for Science and Technology

公益財団法人

松籟科学技術振興財団

松籟(しょうらい):松のこづえを吹き抜ける風。また、その音。

財団案内 2026年度

2026年度 研究助成募集要項
10頁記載

公益財団法人
松籟科学技術振興財団
Shorai Foundation for Science and Technology

財団の概要

名称	公益財団法人松籟科学技術振興財団 Shorai Foundation for Science and Technology
所在地	大阪府大阪市中央区今橋4丁目4番7号
設立	1983年3月12日 2013年4月1日 公益財団法人へ移行
理事長	長谷川 吉弘
目的	当財団では、科学技術に関する調査・研究に対する助成・奨励を行うことにより、科学技術の振興と世界文化の発展に寄与することを目的としています。
事業	研究助成事業、その他、当財団の目的を達成するために必要な事業

役員と評議員 (2026年7月現在)

理事長	長谷川 吉弘	ハリマ化成グループ(株) 代表取締役会長
理事	井上 明久	城西大学 理事長特別顧問
	酒井 清孝	早稲田大学 名誉教授
	染谷 隆夫	東京大学 副学長
	中條 善樹	京都大学 名誉教授
	中島 邦雄	政策研究大学院大学 名誉教授
監事	金城 照夫	ハリマ化成グループ(株) 顧問
	住田 裕子	弁護士
評議員	磯貝 明	東京大学 特別教授
	大山 俊幸	横浜国立大学 教授
	伊永 隆史	慶応義塾大学 訪問教授
	柴田 武彦	理化学研究所 名誉研究員
	杉江 他曾宏	兵庫県立大学 名誉教授
	谷中 一朗	ハリマ化成グループ(株) 代表取締役社長
	鳶巣 守	大阪大学 教授
	松原 英一郎	京都大学 名誉教授
	村上 正紀	立命館大学 特別研究フェロー

選考委員会 (2026年7月現在)

選考委員長	中條 善樹	京都大学 名誉教授
選考委員		
課題A	磯貝 明	東京大学 特別教授
	柴田 武彦	理化学研究所 名誉研究員
	稲岡 和茂	ハリマ化成(株) 研究開発カンパニー長
課題B	松原 英一郎	京都大学 名誉教授
	中西 研介	ハリマ化成(株) 研究開発カンパニー 電子材料開発室長
課題C	大山 俊幸	横浜国立大学 教授
	鳶巣 守	大阪大学 教授
	小畑 裕作	ハリマ化成(株) 研究開発カンパニー 研究企画部長

松籟科学技術振興財団について



「松への恩返し」として 松籟科学技術振興財団を設立

播磨化成工業（現・ハリマ化成グループ）の創業者である長谷川末吉は、1982（昭和57）年5月、科学技術庁（現文部科学省）から科学技術や産業の発展・普及に貢献し、科学技術の振興に功績をあげたことで科学技術功労者として表彰されました。このことを契機に、翌年の1983年3月12日、財団法人 松籟科学技術振興財団を設立しました。

財団名に冠された「松籟」とは「松のこずえに吹く風」という意味の言葉です。このときの思いについて長谷川末吉は後にこう述べています。

「私は、いつかは奨学制度をつくって松の化学をより発展させていきたいと考えていた。私を育ててくれた松、ともに長い道を歩んできた松への恩返しである。科学技術功労者賞の受賞は、奨学制度に踏み切る格好の機会であった」

また、財団設立の趣意として長谷川末吉はこうも記しています。

「近年、わが国の科学技術は、自主技術開発への努力を積み重ね、世界に誇る数多くの技術を創出し、確実な地歩を固めてまいりました。しかしながら科学技術全般に視点を移しますと、とかく成果を期待する余り、応用技術に直接結びつかない研究を軽視する傾向があり、基礎科学の立ち遅れが内外より指摘されております。このような時代の要請を踏まえ、松籟科学技術振興財団は、科学技術に関する、調査・研究、国際交流に対する助成などを行い、全地球的な科学技術の振興に貢献しようとするものです」

2人のノーベル化学賞受賞者を 研究助成受領者から輩出

科学技術の振興と世界文化の発展への寄与を目標に、1983年度の第1回目で7名の研究者に総額900万円の研究助成金を贈呈しました。以後、研究助成規模を拡充して助成を続けてきましたが、そのなかには、1986年度（第4回）の

野依良治氏、1991年度（第9回）の鈴木章氏という2人のノーベル化学賞受賞者の名もあります。

野依氏は「キラル触媒による不斉反応の研究」をテーマに、2001年にノーベル化学賞を受賞しました。また、鈴木氏は「有機合成におけるパラジウム触媒クロスカップリング」をテーマに、2010年にノーベル化学賞を受賞しました。



野依 良治 博士

1986年 第4回研究助成
2001年 ノーベル化学賞受賞



鈴木 章 博士

1991年 第9回研究助成
2010年 ノーベル化学賞受賞

長谷川末吉の遺志を継ぎ 科学技術への貢献は続く

このように松籟科学技術振興財団は優れた科学研究への助成を続け、2013年には公益財団法人に移行し、2022年度には第40回目を迎えました。これを機に2023年度より、研究助成1件当たり、従来の100万円から200万円に増額し、より充実した支援を目指しています。今回の贈呈により、助成件数の総数は844件、助成額は累計9億7,490万円となりました。

現在、世界は環境問題、エネルギー問題、持続可能性などさまざまな課題を抱えており、その解決に向け、科学技術の一層の進展が求められています。松籟科学技術振興財団は創立者・長谷川末吉の遺志を継ぎ、これからも全地球的な科学技術の振興に貢献してまいります。

第43回 研究助成金贈呈式



伊永評議員による乾杯の挨拶



会話が弾んだ懇親会



選考委員会の先生方との受領者懇談会



笑顔があふれる和やかな様子(受領者とともに)

2025年度 助成金贈呈式

松籟科学技術振興財団は、第43回(2025年度)研究助成金贈呈式を2026年3月5日にシャングリラホテル東京にて開催しました。採択された21件の研究テーマに対し、1件200万円、総額4,200万円の研究助成金を21名の受領者に贈呈しました。

2025年度は、研究助成対象として、「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用」、「エレクトロニクスの次世代を担う材料および周辺技術」、「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化」の3つの研究課題について募集し、計90件の応募がありました。選考委員会(委員長:中條善樹 京都大学名誉教授)にて審査の結果、21件が採択されました。

当財団は、2023年に創立40周年を迎えたことを機に、より充実した支援を行うために、助成金の上限を1件につき200万円(従来100万円)に増額しました。今回の贈呈により、助成金の累計は844件、総額9億7,490万円となりました。

贈呈式では、来賓を代表して、文部科学省 研究振興局 淵上孝局長よりご祝辞を賜り、当財団の永年にわたる研究助成活動への謝意と研究者の皆様に対して激励の言葉を述べられました。また、受領者を代表して、東京大学 榎本有希子准教授(現在は京都大学 准教授)よりご挨拶いただきました。

贈呈式に続いて、神戸大学 西野孝名誉教授より「観点を異にする高分子複合材料の環境調和性」と題して記念講演をいただきました。(講演録:P7~)

松籟科学技術振興財団は、ハリマ化成グループ株式会社の創業者である故・長谷川末吉が、トール油(松の油)に関する研究、事業開発の功績により『科学技術功労者賞』を受賞したことを機に、科学技術の振興と発展を願って、1983年に設立しました。

今回、助成する研究によって、人類が求めてきた真理の探求がさらに一歩進むことを確信し、今後も、助成、奨励事業を通じて科学技術の振興に貢献して参ります。



挨拶する 長谷川理事長



長谷川理事長と榎本准教授



受領者代表 榎本准教授



記念講演 西野名誉教授



祝辞を述べる 文部科学省 淵上局長



選考結果を報告する 中條選考委員長



懇親会で祝辞を述べる 渡海議員



懇親会で乾杯の挨拶をする 伊永評議員

松籟科学技術振興財団 2025年度 研究助成採択者一覧

(所属機関・職名は、研究助成金申請時)

課題A:「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用に関わる研究」

榎本 有希子

東京大学
准教授

精密分子設計に基づく難分解性芳香族バイオプラスチックの分解制御とリサイクル



花木 祐輔

香川大学
助教

植物由来ハリマン型ジェルペノイドをリードとした新規創薬シーズの開発



信澤 岳

広島大学
助教

機能性有機素材生産に資する非モデル植物由来新規ワックス生合成酵素の特性解明



野田 秀俊

微生物化学研究会
主席研究員

位置プログラマブル触媒によるオレオ化学の拡張



渡邊 俊介

安田女子大学
講師

異なる植物種で共通する鉄キレート錯体取込み分子機構の解明



棟方 涼介

京都大学
助教

プレニル化フラボノイドアナログの微生物生産と生理活性探索



寺本 岳大

九州大学
助教

植物硫酸転移酵素の基質特異性変化と有用成分高生産への応用



課題B:「エレクトロニクスの次世代を担う材料および周辺技術に関わる研究」

成田 秀樹

名古屋大学
准教授

対称性の破れた新奇スピン伝導デバイスの創製



小澤 大知

物質・材料研究機構
主任研究員

分子レベ・フォトリングラフィによる量子エレクトロニクス素子の創製



佐藤 宏亮

東京科学大学
助教

高分子半導体のポスト極性官能基導入を活用した有機電気化学トランジスタの特性向上



渡辺 清瑚

早稲田大学
次席研究員

含硫黄高分子の分極・分子運動性の制御に基づく超低誘電損失材料の創出



課題C:「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化に関わる研究」

宇敷 育男

広島大学
准教授

超臨界含浸法を用いた金属有機構造体の機能化と革新的CO₂吸収材の開発



吉岡 弘毅

北里大学
准教授

持続可能な有機系新素材としてのアビエタン型ジェルベン系化合物の創出と、概日リズムかく乱による精巣機能障害の改善への応用



田中 隆行

京都大学
准教授

四回対称性骨格を基盤とした高伝導性二次元有機構造体の創出



井上 僚

兵庫県立大学
助教

元素戦略的アプローチによるキラル材料の創出



山岡 賢司

大阪大学
助教

トポジカルな拘束の制御に基づく熱可塑性高分子の強靱化



神林 直哉

京都工芸繊維大学
准教授

主鎖にシアン骨格を有する新奇高分子の構築と機能開拓



正井 宏

東京大学
准教授

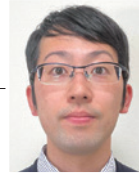
光と水の協働による分解性高分子材料の開発



安達 洋平

広島大学
助教

新規有機ホウ素π電子系の構築と励起三重項状態ダイナミクスの解明



松井 康哲

大阪公立大学
准教授

分子内三重項—三重項消滅による固体フォトンアップコンバージョンの高効率化



酒田 陽子

名古屋大学
教授

新奇骨格変換反応を利用した超分子化学的アプローチに基づく環状有機構造体の創製



財団関係者の方々から お祝いと激励のメッセージ

淵上 孝 氏

(文部科学省 研究振興局長)

研究助成をお受けになられました皆様、誠にありがとうございます。また、これまで支えてこられたご家族、関係の方々に対しまして、心よりお祝いを申し上げます。

バイオマス資源、電子材料、有機系新素材などに関わる研究に対する皆様の日頃からの研鑽とご尽力に深く敬意を表しますとともに、これを契機として、今後も社会経済の発展に貢献する研究成果を挙げられることを期待しております。

松籟科学技術振興財団が、昭和58年の創設以来、長年にわたり我が国の学術研究・基礎研究を担う優れた研究者の方々に支援してこられたことは大変意義深いことであり、長谷川理事長をはじめとする財団関係者のご尽力に対しまして、心から敬意を表します。

これからも研究者の大きな励みとなる本事業が末永く継続し、我が国の科学技術の振興と発展に大きく貢献されることを願っております。

科学技術イノベーションは、国内外の社会課題の解決に貢献し持続可能で強靱な社会を構築する源泉でございます。昨年は、我が国の研究者がノーベル生理学医学賞、ノーベル化学賞を受賞されました。この受賞は、我が国の研究水準を改めて世界に示す素晴らしい功績でございます。文部科学省としても、研究の創造性、効率性の向上をもたらすAIの利活用による科学研究の革新に向けた取り組み、量子技術、マテリアル、健康医療など、国家戦略を踏まえた重要分野の研究開発を一層戦略的に進めてまいります。

結びに、将来科学技術振興財団の一層のご発展と、本日も列席の皆様方ますますのご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

中條 善樹 氏

(選考委員長 理事)

今年度の研究助成を受領される皆様方、誠にありがとうございます。2023年度に研究助成金を200万円に増額したためか、今年は90件の応募がございました。

助成金の増額に伴い、一昨年は63件、昨年は87件と年々増えておりますが、ぜひ後輩の皆さんにも応募を勧めていただくようお願いいたします。

内訳ですが、課題Aは33件、課題Bは17件、課題Cは40件の応募があり合計90件でした。

選考委員による一次評価の後、選考委員会を昨年の12月に開催し、本当に採択したいと思う研究を21件採択しました。応募数90件の中から21件ですから、全体で言いますと4分の1以下、23.3%の採択率となり、かなり厳しいものだったと思います。採択された受領者の皆様方、大いに自信を持っていただきたいと思います。

近年、アカデミアの分野では、論文の数が減ってきた、国際会議への参加者が減ってきた等、ネガティブなことを言われることも多くなってきております。本当にそうでしょうか。選考委員長の立場で皆さんのプロポーザルを読ませていただきましたが、いずれも素晴らしく、この研究を進めたら非常に面白いことになる。日本の将来は明るいと感じます。ついではこの助成金を有効に使っていただき、さらに大きな研究に成長・発展させていただくように、切にお願いする次第でございます。

財団理事長と助成金受領者からのご挨拶

長谷川 吉弘

松籟科学技術振興財団理事長(ハリマ化成グループ(株)会長)

当財団は1983年の設立以来、43年にわたって、当財団の設立目的である科学技術の振興に寄与するために、科学技術に関する調査研究に対して助成金を贈呈するという事業を続けてまいりました。今回の贈呈分も含めて、助成件数は844件。助成金額の累計は9億7,490万円になりました。当財団としては、将来ノーベル賞につながるような研究だけではなく、現時点で世間からは注目されていない分野での研究についても、助成することが科学技術の振興に役立つという考えのもとに、今後も活動を続けていきたいと考えております。

今年度は15件の採択を予定していましたが、選考委員会で審議したところ、甲乙つけがたい応募研究があり、最終的には6件増加して、21件採択させていただくことになりました。助成を受けられる皆様方には、心よりお慶びを申し上げます。

さて、国会冒頭、高市首相は、施政方針演説において、選挙で約束したとおり、日本列島を強く豊かにするために諸政策を実行していくと述べました。一番目に挙げているのは、経済力の強化として責任ある積極財政により経済を強くしていくということでした。そして二番目に挙げたのが、技術力の強化です。強い経済の基盤となるのは優れた科学技術です。基礎研究を含めた科学技術研究基盤を強化し、イノベーションを通じた経済成長や国際的地位の確保を達成する新技術立国を目指しますと高らかに謳い上げられておられます。私の知る限りでは、内閣総理大臣が施政方針演説で二番目に大事な方針として技術力、技術、科学技術振興ということを謳われた例は、今までなかったと思います。

当財団がやっております活動について大きな励ましをいただいたものと解釈し、この活動を続けてまいりたいと強く思っております。今日ご出席の皆様方には今後とも当活動の激励及びご叱咤をいただきますようお願い申し上げます。

榎本 有希子 氏

第43回受領者代表(東京大学 准教授、現 京都大学 准教授)

この度は研究助成に採択いただきありがとうございます。受領者を代表してご挨拶申し上げます。また、選考に関わっていただきました選考委員の先生方、関係者の皆様方に深く御礼申し上げます。

助成金は、小さな研究の芽やアイデアを「こうやったらどうだろう」「本当にうまくいくのかな」という段階で試せる、貴重な資金です。我々研究者にとって、若い時から今に至るまで、どんな段階であつてもとても貴重な機会となり、ありがたいことです。

芽から育てた研究を大きな分野に発展させていくのは、研究者なら誰にとっても重要なことで、「きっかけをどうぞ、頑張って」と応援していただいているということを心強く思っています。

また、丁寧に選考していただき、ぜひこれを採択したいと思っていただいたことを嬉しく思います。

今回、助成金に応募するにあたって過去の受領者の先生方のお名前を拝見すると、少し上の先輩方が以前に受領されていたり、もっと先に見ますと、ノーベル賞を取られた野依先生や鈴木先生もいらっやったりということもあり、その最新の受領者のリストに名前を連ねることができたのも、とても光栄に思っております。この機会を大切に研究をさらに発展していきたいと思っております。

助成金を申請するにあたって、課題Aの分野で申請し採択いただきましたが、これは私が植物の有用成分、それらの高度利用という分野に興味を感じ、木材の分野で長く研究していたことによります。私は今、その木材の高度利用の「バイオマスプラスチック」という、植物からプラスチックを作る研究をしています。微力ながら、その研究をきちんと発展させて、貢献していきたいと思っております。

最後になりましたが、この度は本当にありがとうございました。今後ともご指導のほど、どうぞよろしくようお願い申し上げます。

演題

観点を異にする 高分子複合材料の環境調和性

神戸大学 西野 孝

1. はじめに

近年、自然の圧倒的なパワーの前に翻弄される機会が増えている。それが猛暑や大雪、局所大雨・大雪のような自然災害の場合もあれば、地震や津波のような地殻変動に伴って現れる場合も、コロナ禍のような疫病の蔓延となる場合もある。それらの中で、科学技術をもってして、多少なりとも人類による制御を目標とした試みが行われている。

材料の分野で、金属、セラミックに合成高分子が加わって高々100年余りである。さらにさまざまな素材を組み合わせることで高分子複合材料が創製され、小はIC、LSIなど電子材料から、車、飛行機などのモビリティ、さらに大は建造物や橋梁に至るまで、各種の展開がなされている。

大気や水質、土壌などの汚染が公害として問題視されるようになって久しいが、地球規模での温暖化を課題とした「環境」はいつごろから世の中で語られるようになったのだろうか。この点について、図1には、朝日新聞クロスサーチにてキーワードとして「環境」で検索した節のヒット数を示した。

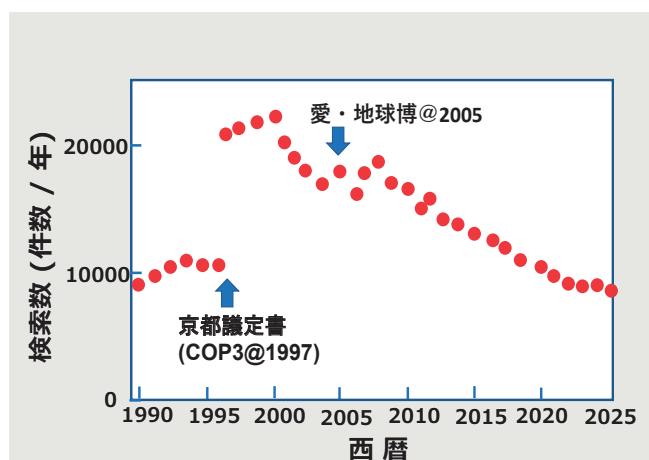


図1 朝日新聞クロスサーチにてキーワード「環境」でのヒット数

1997年に不連続な急増が観察され、これは京都・宝ヶ池の国際会議場で開催された国連気候変動枠組条約締約国会議(COP3)での京都議定書の採択が契機となったことに基づいている。その後、熱しやすく冷めやすい日本では、2005年に開催された愛・地球博の時期に一時的な増加は見られるものの、減衰に次ぐ減衰を経て、今日では前世紀のヒット数に戻ってしまっている。長期の視野に立てば、憂うべき事態である。

本稿では、松籟科学技術振興財団2025年度贈呈式・記念講演における、高分子複合材料を題材とした環境調和に関する著者の講演内容の概要について記す。

2. 自動車と環境

現在の本邦の産業を支える最も太い柱は自動車関連分野である。それだけに環境との関りに焦点が当たる場面も多い。ただし、話題はガソリンエンジンを駆動源とすることに伴う温室効果ガスや有害物質の排出に限定・偏重し、新しい動力を使う電気自動車(EV)にばかり注目が集まった。その際、はたしてEVは環境に対して最適解かどうか、といった本質の議論が置き去りにされたまま、EUは、2035年以降はガソリン駆動の新車の全面販売禁止とまで宣言した。

ところが、2025年12月には突然この宣言が撤回された。その一方で、2026年2月に突然米国・イスラエルはイランを空爆し、中東に依存した我が国の石油供給が危ぶまれ、ガソリンだけでなく、ナフサを原料とする各種高分子の供給不足が問題視されている。そうすると、環境に悪い素材とレッテルが貼られ、あれほど利用に難が示されたプラスチックを求めた右往左往が始まり、「環境調和性」の概念が政治・経済に



よって翻弄されている。しかしながら、2020年には世界中の路上の車の総重量が1.58Btonであったものが、2050年には2.0Btonに増加すると予想され、電池搭載や衝突安全性、自動運転性能の付与によっても一台当たりの車両重量は増加し、走行エネルギーの消費量の増大に直結する。

したがって、環境とのかかわりで言えば、車体の軽量化は本質的に喫緊の課題となる。この際、金属を代替する軽量化の観点から高分子複合材料が注目されている。

3. セルロースと複合材料

図2には、Web of Science (WoS: 科学論文の代表的な検索ソフト) でヒットした「繊維充てん複合材料」に関連する論文数を示した¹⁾。21世紀になって、論文総数が急激に増

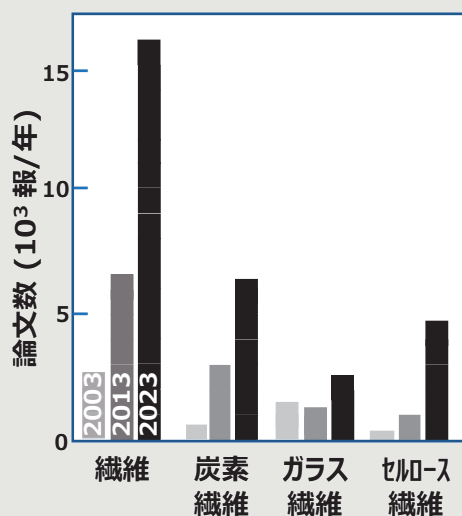


図2 「複合材料」×各種「繊維」での検索論文数の変遷 (Web of Science)

加していることがわかる。中でも充てん繊維の主流が、ガラス繊維から炭素繊維へと移り変わり、それと共に、20世紀には注目されていなかったセルロース繊維の利用を主題とする論文数の増加が著しい。

次ページの図3 a)には、天然繊維であるラミー(苧麻)の単繊維、セルロースから得られるセロハンフィルム、セルロース系複合材料の中でも、充てん繊維とマトリックスが共にセルロースから構成されるall-セルロース複合材料の応力-ひずみ曲線を示した²⁾。ラミーは天然繊維の中でも最も力学強度の高いことが知られている。それに比較して、幾分強度は低下するが、all-セルロース複合材料の引張強度は、軽量金属で知られるマグネシウム合金の2倍である。また、充てん繊維とマトリックスが同じ素材であるため、図中に示したように複合材料でありながら透明となる。all-セルロース複合材料は全て持続可能な天然素材から構成されており、使用後は生分解する、究極の環境調和モノマテリアルである。さらに、図3b)には、セルロースの鎖軸方向と金属の熱膨張挙動を示した。一般に、加熱すると材料は熱膨張する。

ところが、セルロースは加熱しても熱膨張も熱収縮もせず、金属と比較しても、いかに熱寸法安定性に優れているかが見て取れる³⁾。all-セルロース複合材料は、セルロース固有の物性である、この極低熱膨張性を兼ね備えており、利用できる分野への展開が望まれる。

4. まとめ

高分子材料と環境の関係を考える上で、リサイクルに始まって、生分解性から、バイオベース、天然ナノ繊維、海洋分解性と、時代と共に求められる素材、特性が目まぐるしく変

演題 観点を異にする高分子複合材料の環境調和性

神戸大学 西野 孝

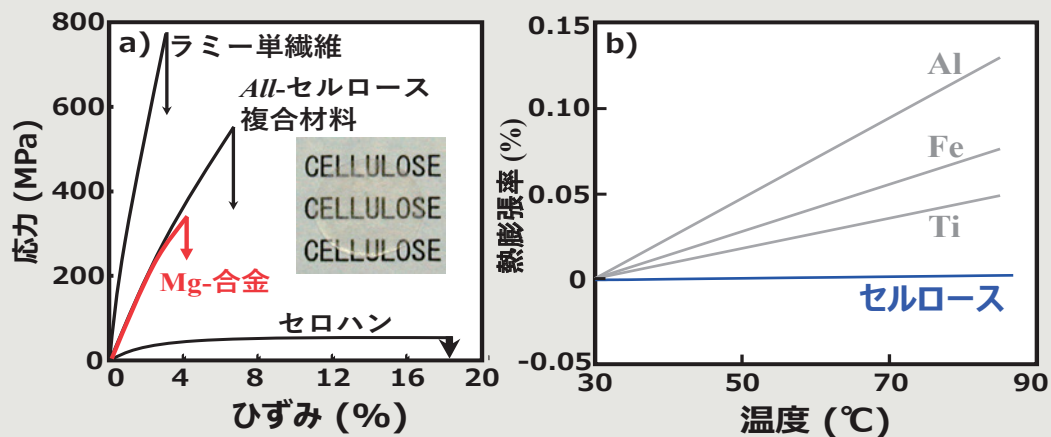


図3 a) all-セルロース複合材料, ラミー単繊維, セロハンの応力-ひずみ曲線, b) 各種金属とセルロース(鎖軸方向)の熱膨張挙動

遷し、サーキュラーエコノミーと用語は変わったものの、最近また原点に戻ってきた感がある。このことは、環境調和にはさまざまな観点があることを意味している。たとえば、自動車の空力抵抗はデザインだけでなく表面平滑性が大きく関係し、燃費と塗膜性能の関連が環境と密接に関連した課題となる。タイヤの転がり抵抗と摩耗量の相矛盾する低減なども環境調和と関連しており、新規ゴムの材料開発が求められる。複合材料を組み立てて一体化するにあたっては、現状ではボルト・ナットが採用される。今後は製造時のタクトタイムの短縮や工程管理から、接着剤を利用して、耐久性、信頼性の獲得、寿命予測が望まれ、材料に対する要求特性は益々過酷化している。その一方で、廃棄時のことを考えれば易解体性の導入が環境調和上の検討課題となっている。塗膜、タイヤ、接着剤、どれもが高分子である。

拠って立つ地球から、日々、われわれはさまざまな恩恵を

受けていることを改めて深く認識する必要は言うまでもない。その上で、正しい情報に基づいて、さまざまな観点から、環境に関わる高分子材料科学の深化が必要不可欠な時代が到来している。研究におけるCO₂(Curiosit,Originality & Objective)を大事にしつつ、高分子材料の開発に関わる研究者、技術者の益々の活躍を祈念したい。

- 1) 西野 孝、複合材料 その後10年の動向、繊維学会誌、80、413-419 (2024).
- 2) T.Nishino, I.Matsuda, K.Hirao, All-cellulose Composites, *Macromolecules*, 37, 7683-7687 (2024).
- 3) T. Nishino, Chapt.33, High Performance Polymers, *Springer Handbook of High Functional Polymers*, Y.Chujo, ed., Springer, 711-724 (2025).

研究助成 及び 募集要項

(2026年度 募集要項)

研究助成事業

研究課題

課題 A

「植物有用成分およびバイオマス資源の高度利用に関わる研究」

課題 B

「エレクトロニクスの次世代を担う材料および周辺技術に関わる研究」

課題 C

「持続可能な社会を実現する有機系新素材およびその機能化に関わる研究」

応募資格

国公立大学、高等専門学校、国公立研究機関

あるいはそれに準ずる研究機関に所属する常勤の研究者

年齢制限：45歳以下とする(原則)

助成金総額

助成金総額：3,200万円程度

1件当たりの助成額：200万円

研究助成金交付についての選考手続き

手続きの概要は以下の通りですが、詳細については、7月前後に更新するホームページをご確認ください。

募集期間：2026年7月21日～9月30日

選考審査：課題ごとの選考委員による1次審査を経て、12月に開催する選考委員会にて採択テーマを最終決定します。採択結果は、年内に応募者に連絡し、助成金は2027年3月に給付します。

詳しくは財団のホームページをご覧ください。

公益財団法人 松籟科学技術振興財団 ホームページ

<https://www.shorai-foundation.or.jp/>



公益財団法人

松籟科学技術振興財団

Shorai Foundation for Science and Technology